

太陽の音楽（8）

1. 心ある人生のその原動力となる、子供心。7章で、その基礎となる在り様を本来に、力強くその原因を動かし得た経験は、連なる時代のその背後に身を置きつつその時を待ち続けた、遙か昔の音の風景の望みを、この今に通しやすくする。

それだけ、子供時代の太陽の光に支えられた遊びは貴く、それを以て引き寄せられる未来は、不安を知らない。これまでのどの時代にも為され得なかった、子供心のその真の原因の重ね合い。それは、凝り固められた歴史的負の連鎖のその土台を砕く力になるもの。何もせずにならざる現実を生み出し得る新たな普通は、太陽の光の音との融合を基に、自らのその質を成長させる。

人間の経験の外側であった「太陽の音楽」は、思考の質が生命としてのそれとなる人のその（創り出される）経験の一部となり、この8章を共に支える。永い時を経てここに形になる「太陽の音楽」は、太陽の光の音の時代を知る存在たちの、その切なる想いである。

2. 不自然という世界を知らず、気負いや緊張といった感覚とも無縁でいる生き方が暮らしの普通であった人々は、ただ生きることをし続け、身体を離れる（終える）時も、その姿勢は変わらない。始まりも終わりもなくその普通を繋ぐことを基本とす

HP「無有日記」

<http://www1.odn.ne.jp/mu-mew/>

るそこでは、誰も不安や不穏という次元を知らず、歪な世の蓄積からなる死の概念も存在しない。人は、共に支え合う調和ある風景で、健康という生を自然に生き、その全てを安心して、自然に生を生きる。

人が身体を終え、姿を消す時、失う辛さも、残される悲しみも、誰も知らない。その変わり行く自然な営みの姿を前に、そうであって欲しくない自分は、誰も経験しない。ただ共に生きることが生きることの理由であるような環境の中で、人は、生命を生き、人間という生を、その意識もなく全うする。それは、時を迎えて群れから離れ行く海の哺乳類たちの姿のように、さりげなく心を重ね、見つめ合い、尊重し、生かし合う。

太陽の光の音は、そこから届く。その時代と同じ場所(地上)で生を送る人の世に、その頃の経験の記憶(の原因)を持つ存在たちの心の芯を通り、流れ出す。当時、その真ん中に居た、形無き原因の世界の核となる存在も、その意思を確かにする。

3.かつて、ある非生命的な意思によって、細胞深くの生命源と繋がる意思活動までが不自由にさせられてしまう程の負荷を覚えた時、彼(彼女)は、そのどうにも対処し得ない形無き原因への浄化は未来に任せ、その時のために、その材料になるであろうことを形に、皆に、繰り返し土器を作らせる。

土偶の元となる出来事(奇形、母体の異常と痛み、蛇の脳を経たの異生命(体)の意思の具現)が続く中では、それを仕

掛けた姿無き存在によって何度も脳を壊されてしまうが、それでも太陽の光の音を内に秘めつつ、真を外さずに行動し、生命を生き続ける。歴史が刻まれ出してからは、生きる力を尽く削がれ、非人間性をしつこくすり込まれてしまう程、彼(彼女)はその全てを徹底して支配されてしまうのだが、太陽の光は、光の音を自分のものとする存在たちを繋ぎ、それぞれにひとつひとつの大切な役を担わせて、‘その時’まで持ちこたえ得る道を差し出す。

現代は、その確かな原因が具現化した時代であり、太陽の音楽という道を通り、太陽の光の音の時代のそこでの普通(の原因)を共に再生させる時である。太陽の光の音は、7章以降、本格的な実践の時を経験する。

4. 太陽の光に抱かれ、人間も自然界も共に太陽の音楽(光の音)を奏でていた遙か昔の、この地上での普通世界。それがそうではなくなる負の原因に押し込まれながらも、ここにその太陽の光の時代の音が繋がり得るという普通は、人間の思考からなる奇跡の次元を大きく超える。思考の時代とも言える、その間に生み出された、地球自然界にとって無くてもいい原因の形は、太陽の光で、居場所を無くしていく。

脳が病むことを知らない自然な暮らしでは、人の何気ない感覚(動き)が不自然な原因をさらりと浄化し、ありのままにいる人々は、不調や痛みの理由を少しも寄せ付けない。脳の働きが感覚的な調和を基本とするので、そこでのふとした発想

は、必要なものや空間を自由に創り出し、その自由を皆で楽しむ。そうであるための(そうであろうとする)思考は何も要らず、ただそうである風景に、人は生かされ、自らもその風景になる。

その風景からは、この時代のあらゆることが違和感であるゆえ、そこでの普通が、光の音としてここに伝わり、心ある人の脳を本来にすれば、普通の質は次々と更新され、元々そうであった時の普通へと、世は変わり出す。不安や隔たり、病気や争い事が力を無くし、自然界の生命たちも、安心して人の世と融合する。それは、人の思考では、凄まじい進化。でも、人の心の芯からだど、ただ懐かしい時の光の音の風景である。

5. 有る世界から無い世界を観ることは、それなりの感触を伴う理解を生み出すが、無い世界から有る世界を観ることは、有ることがあたり前の世界に居ては、永遠に難しい。それでも、有るべきことと、無くてもいいことへの感覚的把握が普通本来のそれとなれば、少しずつそうである自分に触れ得、その燃料となる形無き抽象(原因)の変化にも反応するようになる。有る無しの世界は、有る世界発の、無い世界を退けた有り続けるのみの世界。どちらでもあり、どちらでもない感覚的な成長は、そのどこにも無い。

無い世界からの、生命としての思考に触れる時、それだけで人は健康になり、問題事からも縁遠い自分でいられることを知る。病気は無いもの。争いも衝突も、その原因はどこにも

太陽の音楽は、太陽が嬉しい音楽。太陽の嬉しさは、地球自然界の安心と平和。そして、そこで生きる生命たちの、自然な姿。

生命たちは、同じ仲間である人間に、切なる想いを託す。これ以上自分たちの本来を抑え込んで欲しくない…。それは、人間にしか出来ないこと。人間が何よりすべきこと。

「太陽の音楽」に在る、全ての文章とその原因を自分のものにし、真の普通を生きる。そうにはなれない理由に付き合う時間は、どこにも無い。永い時を経てやっと引き寄せられた、一度切りの、生命源からなる原因の時。太陽の光の音と共に、その原因を未来に繋ぐ。(by 無有 8/08 2018)

因の風は、どこまでも優しい。

8.そして、自然界の(LED 照明による)悲しみを自分のことのように感じ、それを本来へと戻すべく意思表示を普通とする自分がいれば、太陽の光が今よりもずっと元気だった、数十万(数百万)年前の頃の風景と、そこでの自分を、左手ひらで感じてみる。太陽も地球も、それを嬉しい。

経験から自由でいるというのは、どちらでもあってどちらでもない原因の中に常に自分が居るということ。それは、思考型の(二者択一的な)価値判断を一切寄せ付けず、結果(過去)に居続ける感情にも付き合わない。EW初のスタイルを通して見る、この今ならではの変化の姿は、まさにそれを普通とする自分。その経験は、何も無くても必要なもの全てが有るかつての風景のその原因を、そのままここに通す。触れるもの、行く場所、居る空間のどれもが、自然界が喜ぶ原因のそれになる。

音(音楽)関わりの真の普通を通して本来を取り戻した脳は、ぐんぐんとその普通の質を高め、通常あり得ないであろうことを、楽しみながら表現する。何気に生み出される空間は、平和そのもののそれとなり、そうではない空間を余裕で包み込み浄化しつつ、広がり、伝わり、繋がって行く。そこには、あたり前に健康で健全でいる原因も在る。太陽の光の音との融合が生きる基本となる時を経て、あらゆるものが、生命本来の変化に乗る経験を普通としていく。

無いもの。それをそのままに生きた遙か昔の、太陽の光の時の記憶が甦る。無くてもいい経験の蓄積は、それを元とする思考で固められても、その思考を不要とする原因によって、その力を失くす。その原因の成長は、そのまま、太陽の光を誘い込む。

無い世界発の発想は、そのどれもが人間本来の姿であり、生命としての普通の形である。試しに、病気は無いものとしての生を送ってみれば、自ずと健康の原因が高まることを体感し、不自然・不調和を生み出す価値観からも離れることになる。争い事(問題事)などどこにも無いものとして思考を自由にさせれば、経験を引っ張らずに次なる経験の原因に責任を覚えるようになり、二者択一的世界からも自由になって、安心と平穏が普通になる。

それが、人間の普通である。病気や問題事が有る現実での普通は、それらとは無縁の生命たちと共に生きるこの世界で、居場所を持ち続けることは出来ない。

6.その無い世界からなる真の普通は、永いこと本来の意思活動を押さえ込まれていた人の脳が自由を取り戻すことによって、有る世界では限り無く信じ難いこととなるような現実を創り出していく。

記憶の中の音の風景から要らない性質の原因が居場所を無くすだけでも、それへの流れは、力強く、元気に動き出す。そして、理由の要らない安心と繋がる心が力を発揮し、不安

や怖れの原因を処理していく。

太陽の光の音がかつてのように心身の活動と一緒に参加するようになると、自然界の自然な望みが自由に人間の世界に入り込むようになり、不自然さや不健全さを備える現実が、繋がる場所を無くす。そして、生命世界には異物となる(人間優先の)思考型の価値観は、姿を消す。

心ある人の脳は、それを普通に楽しむ。何もせず、何も求めず、ただ何気ない違和感が、事の本質をその原因から変える。過去をそのままに次へ行こうとする、結果絡みの濁った空間は、いつのまにか粉々になる。不安定感を増殖させる、重く流れない時間の重なりは、ふと気づけば、変化の中に溶ける。

無い世界(次元)に支えられる生きた感性は、有る世界の、形無きその原因の中に有るものを、無いところから厳しく観察し、それを生命の基本形となる中庸の原因と重ねて、その質を本来にする。それは、元来、人間の脳が持つ、真の普通。その導き手となる存在は、その自覚もなく、そうである時を淡々と歩み始める。

7.音感が、頭だけで作られた音楽を必要としなくなる程、自然界が嬉しいそれになると、その時を待っていたかのように、生命の意思は、次なる浄化作用を促す。それは、脳の中のある次元層に感知されないまま居場所を確保していた、姿無き不穏な意思のかたまり(酷く病まされた自然界の痛みにつき合うようにして形無きかたまりと化した不健全な経験の性質)へ

せることである。その左手を更なる EW に活かし、その普通を成長させる。

7.利き手の都合が生まれたのは、より強く、激しく他を攻撃するために、片方だけの筋力を鍛えたことによるもので、否定感情とは無縁の世では、それは無かった。右手が主になったのは、言葉では表し難い次元であるために伝わりにくいから、そこにはある種の感覚が鈍化するに至る、形無き存在の危うい意思が絡んでいる。

それ有りきで繰り返し時を連ねて来ているので、右手主導の利き手を不要にする時を経験することは考えられないが、それでも、その固められた事実の潜む負の原因を力無いものにするには出来る。左手の EW はそれを可能とし、自由に両手を使っていた、争いも支配も(苦しみも痛みも)無い時代の原因をここに運び入れる。そして、そこからだと違和感でしかない病気の元を崩し、問題事の手前に在る形無き不穏な感情の影響も無くさせる。

「太陽の音楽」との融合を通して、人や場所のその姿無き原因の性質に敏感になり出した自分がいれば、右手を使わず、左手ひらだけで「太陽の音楽(7~9)」と「太陽の光の音」を感じてみる。手のひらを立てるのも、体のどこかに手を置くのも OK。右手に特に仕事をさせず、左手だけの EW を変化に乗せる。そして、左足(指)や左手、左向きなどに意識を向け、その時の感覚を楽しんでみる。そのことで始まる新たな時の原

でも、これまでのどの時も心ある人の中に在った、その変化の原因。動き出し、流れ始めたら、その原因は、どこまでも普通に具現化される。

6.ここに至る無くてもいい経験の中で脳に染み込ませてしまったもの全てから自由になることで、かつての太陽の光の(音の)時代のその原因と繋がることは出来るが、その状態を普通とするのは、この現代に生きる人間にとって、限り無く難しい。それでもそうあるべきところへ行くことは不可欠で、心ある人は皆、その大元となる原因を内に潜める。無有日記との縁は、そのためでもある。

これまでの経験による思考や無意識の影響力がどんなであれ、少しでもそこへと変化に乗り、確実にそうである自分を重ねていくために、ある手法に事の流れを重ねてみる。それは余りに意外で、物足りないものかもしれないが、自らの本質となる部分を見つめることと、生命としての責任感覚を高める必要性がそこでは大切な要素となるので、そのことの難しさや厳しさを通して、自ずと原因の質は変わっていく。そして、同時進行で、それは自然界が喜び、安心する動きをする。「人間」と「仏陀の心」も、ごく普通の理解としてその材料となる。

その手法(行為、動作)については、これまでも、左手で食事をしたり、左手で物を扱ったり、動かしたりと、それ関わりものを様々に実践してきている。そう、それは、左手を活躍さ

の違和感とそれへの処理。心の動きと脳の健全な働きを不自由にさせていた(封じ込めていた)それは、音の本来が力強くなることで、そうであるべき時を迎えざるを得なくなる。

「太陽の音楽」の EW によって動き出す、その変化の時。形無き原因の世界の変革(進化)とも言えるそれは、まさに生命の望み。歴史が刻まれ出す時よりもずっと昔、人の心は、脳に入り込んだある性質の姿無き意思により、力を無くす。その部分と繋がる体の別の部分の、その別次世界との通り道も、それまでと同じ仕事をし得なくなる。

その修復・浄化への道は、とても厳しい。それでも、それが始まり出したことの意味は大きく、そのことで経験することは、これまでの理解を大きく超える。遙か昔の心ある人たちが、その意識もなく、やむ無く経験させられた、世の病みの原点とも言える、彼らの生命の意思への封殺と破壊。永い時を経て、ここに、それへの対処の時を迎え、その非生命的な負のかたまりは、次第に崩れ出す。

数万年(~数十万年)という、気の遠くなるような年月における、そこでの心身(脳)の不自由さの原因のかたまりが初めて動き出すわけだから、その過程では、気だるさや不調感(体の重たさ、眠気)など、かなりのものとなる。けど、そのひとつひとつの変化が、少しずつ時代の色を変える力になる。何の問題事も無かった、まだ人口も少ない時代に生きていた人たちの切なる想いが、繋がり得たその原因(太陽の光の音)と共に時を突き抜けて、ここに具現化する。この時の脳の変化は、

奇跡という名の普通を広げ、共にそれと融合し得る新たな生命たちを増やす。

8. 思考を忙しくさせる分、人としてあるまじき原因の嘘(本性の危うさ)は隠しやすくなる。知識や情報の世界に身を置くことで、心の無さも上手くごまかし得る。

その形あるところに価値を置いた多数は、皆がそうであることで見えなくさせられる不穏な思惑に浸り、原因が動かないままの中身の無い知識(情報)世界だけである種の経済が成り立つという、恐ろしく低次の世界(病み世)を作り上げる。

「太陽の音楽」は、その嘘の原因を、自然界の変化そのものの生命の原因で包み込み、太陽の光で、余裕と遊び心一杯にその世界をくすぐり、中身を表に出す。人間の生命としての変化・成長を止める原因の嘘は、元々この地上のどこにも無かったもの。太陽の光の音が元気に響き渡ると、支配欲や権勢欲(差別心、優越心 etc.)の燃料となる形無き嘘の(原因の)次元が、おかしなくらいに揺れ動き、焦り、崩れ出す。

その生命世界の普通の中で、生きる自由をずっと抑え込まれていた人の心身は、これまでにない自浄力を活発化させ、染み込んでしまっていた要らない負の原因を尽く取り外す時を、細胞たちの意思と共に楽しむ。胸や背中ががちがちになり(こわばり)、痛みを伴う圧迫感を覚えることがあるが、それは変化への喜び。まるで腐敗型の虫が体の中でうようようごめくような気分の悪さを感じることもあるが、それも嬉しい。そんな

との融合を重ねることで、遙か昔の、自然そのものの自然界のその原因をここに運ぶ。そのための EW を進化させながら、その時の記憶を持つ生命たち全てを元気にし、ここに至る切なる経験のその原因を浄化する。動物も植物も人間も、太陽の光に抱かれる。

5. 太陽の光の時代、生命たちは、どちらでもあり、どちらでもない中庸の次元に包まれた自然界の中で、共に自らの分を淡々と生きる。人間もその自然界の一部。一生命としての人間時間を、他の生命たちと共に、心温かに、健康そのものを生きる。

病気や問題事の存在を前提としたこの時代に、かつての太陽の光の風(原因)を誘い込むことは、常識では考えられない。でも、それらの困ったことが何一つ無かったその時代の人間の脳と今のそれとの間に、違いは無い。「太陽の音楽」が案内する、その頃の経験の(記憶の)原因との融合。ムリなくそうである人の脳の変化により、病気や問題事の背景(理由)と少しも触れることのない新たな原因が創られる。その時が、ここに在り、そのためのこれまでが、これからと繋がる。人間のあるべき在り様が、その基本から生まれ変わる。

その機会の中では、どんな厳しさも、喜びでしかない。自然界が安堵し、地球が喜ぶ、人間本来の生の姿。ずっとこの時を待ち望んでいた生命たちは、自分たちと時を重ね合う人間の、その歩みを、殊の外嬉しい。これまでと全く次元が違うよう

気に育ち、またある人が珈琲を入れてくれると、それだけで心身が元気を覚えることがある。片方では全くそうではないこともあり、草木は枯れやすく、美味しく感じるけど気分までが落ちてしまう珈琲もある。

水は、その人の本質に正直に反応し(転写され)、その影響を受ける植物も、そこに在る原因の性質をそのまま反映させる。かつて自然界が苦しみを覚え出した時のその背景と融合する、危うい本性を備える人の生の原因は、動植物たちの生命力をその意識も無く奪う力となる。

4. 歴史が刻まれるより前の、病気も争いも無かった時代に生きていた経験を持つ人たちは、動植物たちと同じように、非生命的な原因を潜める人間のその歪な姿に反応する。自然界と共に自然に生きた彼らは、動物と同じように人間という種を健全に育み、想いを融合させて、生かし合う。遠く離れていても、自分のことのようにその人を感じ、どんな時でも、全てであるひとつの人間の時を守り続ける。

その普通が崩れ出した時の経験と、それ以降の重苦しい風景は、誰もが記憶する。人生を連ねても、いつの時も押さえ込まれて尽く壊されてしまう、彼らの切なる望み。非人間性を普通とする人間の数にどうにもならなさを覚えながらも、変わることのないその本質をそのままに生きることを実践する。動植物たちと共に響かせる太陽の光の音は、永遠であるから。

「歴史の芯」の時を経て辿り着いた「太陽の音楽」は、それ

状態を経て、生きる原因は確実に変わり出す。

ふと見渡せば、時代の好転反応のその形無き原因の風景の変わり様に気づかされる。腐敗・停滞型の原因に違和感を覚えることのない非生命的な本質を備える人は、内に潜める醜い感情(我欲、暴虐、ふしだら etc.)を、それまでのようには隠し続けられなくなる。人の苦しみを他人事に、身を飾り、好き勝手に欲のままに生きられる生を本心が望む人は、その大元となる自らの中の恐怖と怯えの感情と向き合わされる。妙な高揚(興奮)と有り得ない意気の沈みにも見舞われる。

「太陽の音楽」の EW は、どこまでもさりげない。ただ人の世が、自然界の望みと融合する本来の時へと戻るだけだから、始まりも終わりも無く、その全てが、普通の中で、普通に為される。そして、これまでの全てが、これからへの原因になる。かつてのように、太陽の光の中で共に生きる。(by 無有 8/05 2018)

太陽の音楽（9）

1.動物たちは皆、それぞれに同種の仲間たちと同質の生の営みを共有し、互いに自分たち特有の個性を同調させながら、感情(心)を響かせ、望みを重ね合わせつつ、自然界の中での自らの分をありのままに生きる。植物も、その生態は違えても基本は同じ。どこに居ても、同種間との繋がりを元に、ただ生きることを理由にそのままを生き、それぞれが、一生命としての個性ある分を実践する。

同種の繋がりは、動物も植物も、何の理由も無くあたり前に大切にされ、他のそれとの自然な融合と、互いの在り様への尊重がその基本となる。そこに微生物の次元が生潤滑に加わり、水や空気が、その全てを生かす。それらに守られている立場の動植物たちは、そのことを本能的に知るゆえ、自然界の中では皆、全てであるひとつの真の在り様を支え合う。

2.自然界のその自然な姿を守ることを生きる基本に備える人間は、動植物たちの、その生命としての姿勢を自らの生に重ね、共に生かし合うことを普通とする。病みを知らず、争い事とも無縁でいるその人間の暮らしに、不自然・不調和な様は生まれぬ。悲しみや切なさといった感情も誰も経験することはなく、そうである経験の中で、人はその普通を繋ぎ続ける。そこに在る、あたり前に健康でいる、ただそれだけの原因。平和

も愛情も、それそのものでいる風景の中では、風や水の流れと変わらない。

それがそうではなくなった時の、そのあり得ない経験は（「歴史の芯」）、その理由がどんなであれ、その原因も含めて、それは自然界の全ての生命たちに響き、伝わり出す。一度も経験の無かったそのことがもたらす影響を、人間は（動植物たちも）知る術を持たない。それまで存在しなかった悲しみは、遠く離れた生命たちにまで、無くてもいい緊張を与え、普通であるはずの彼らの営みに、異常な負荷を覚えさせる。人は、必然的に、その事実（異変）を記憶する。動植物たちと共に、遙か昔のその時から今日までずっと、経験しなくてもいい悲しみの繋がりを持ち続ける。

3.ある犬が何メートルも離れたところを歩く見知らぬ人に異常な程に吠える時、彼は、その人の中に、非生命的な本質を見る。遠い昔、動物たちに要らぬ苦しみを与えて悲惨な現実を作り出した人間の、その人生を支配していた姿無き意思（本体）が現代に選んだその人の姿。犬は、それに反応することを許される心ある人との安心の空間で、その切なる記憶を形にする。反応の形は様々でも、動植物たちのその次元の基本は同じである。（※ある人間に同胞感覚を覚えて、感情を刺激され、生きる自由を強く願う時に盛んに吠えることもある）

ある人が何気に接すると、特に何もしてないのに草木が元